

総合教職実践センターだより

第1号

発行日 2025年11月20日

巻頭言

小児期逆境体験に立ち向かうトラウマ・インフォームド・ケアを 学校教育にも

総合教職実践センター長 藤井啓之

今、日本では、子ども・若者の自殺の増加が問題となっています。つい先日、2025年の自殺対策白書が閣議決定されましたが、2024年の自殺者のうち15歳～29歳は3125人で5年連続5000人超と高止まりしています。小学生から高校生の自殺者は529人と過去最多となっています。近年の日本の特徴として、女子の自殺が増加していることも指摘されています。15歳～34歳の若年層の死因の第一位が自殺というのはG7の国では日本だけです。

自殺にはさまざまな理由があると思いますが、教師を目指す皆さんには、自殺の背後に小児期逆境体験（ACEs: Adverse Childhood Experiences）がある可能性があるということを知っておいてほしいと思います。

アメリカではACEsの項目として①情緒的虐待、②身体的虐待、③性的虐待、④情緒的ネグレクト、⑤身体的ネグレクト、⑥家庭内暴力、⑦家族のアルコール・薬物依存、⑧親の別居・離婚、⑨親の精神疾患、⑩親の収監があげられています。アメリカのある研究では、このうち4項目以上当てはまる人は、1つも経験していない人に比べて、うつ病が4.6倍、アルコール依存が7.4倍、自殺未遂が122倍になるというデータが示されています。

日本でも虐待件数も精神疾患患者数も増加の一途をたどっていることを考えると、学級のなかにACEを経験している子どもが少なくないことが予想されます。ACEを体験した子どもたちは、ときには粗暴だったり、キレやすかったり、あるいは無気力だったり、学校で、さまざまなトラブルを起こすことが考えられます。そういう子どもに対して、正面から努力や規律を迫っても意味がありません。逆に、近年注目される、いわゆる「教育虐待」によって、一見「良い子」に見える子が精神的な脆さを抱えていることもあります。いずれにしても、子どもたちに逆境体験があるのではないかとことを予想し、子どもたちのトラウマに配慮しながら、子どもたちにまずは安心感を保障していくことが重要になります。

近年、このようなアプローチは、トラウマインフォームドケア（TIC）と呼ばれ、医療、保健、福祉、司法など様々な領域で取り込まれるようになっていきます。しかし、教育は、子どもたちを訓練するという側面が強いため、学校教育では、なかなかTICを意識した取り組みが行われていません。このことが、子どもや若者の自殺を助長することになっている可能性もあります。

皆さんが教師になったとき、このような子どもたちの苦悩に寄り添いながら、生きる希望と勇気をはぐくむことができるよう、学生時代に一つでも多くのことを学んで、教師生活に備えてもらいたいと思います。以下、参考文献を示しておきます。

- ・ジェニファー・ヘイズ＝グルード、アマンダ・シェフィールド・モリス他『小児期の逆境的体験と保護的体験——子どもの脳・行動・発達に及ぼす影響とレジリエンス』（明石書店、2022）
- ・亀岡智美編『実践トラウマインフォームドケア——さまざまな領域での展開』（日本評論社、2022）



ステップアップ講座に参加して

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 S.B

1 参加した理由

私がステップアップ講座に参加しようと思った理由は、この講座が自分にとって教員採用試験の合格に近づくと感じたからです。教員採用試験の対策講座は定期的に行われており、面接練習などを長期的、定期的に行うことは大切であると考え参加しました。

2 参加してみてよかった点

まず参加してよかった点として、大学にいる先生方とのつながりができたことを挙げます。このステップ講座以前は、どのような場所かやどんな先生がいるのかがあまりわからず、総合教職実践センターに行けていませんでしたが、この講座で総合教職実践センターがどのような場所かやどのような先生が在室しているのかを知ることができ、足を運ぶきっかけとなりました。

そして、面接の緊張感を感じることができたこともよかった点です。この講座には、普段授業でお世話になっている先生方だけでなく、今まであまり関わりのなかった先生もいらっしゃり、今まで以上に本番に近い緊張感で面接練習を行うことができました。

それから、面接練習を行うことで自分がどのような教員になりたいのかというのがより明確になっていったと感じました。また、その教員になるためにどのような支援をするかなどについて考えが行き詰ってしまった際などに総合教職実践センターの先生方に相談をして考えがまとまることも多々ありました。

3 講座の内容とそこで学んだこと

この講座では、面接練習を2回行いました。1回目では1つの質問に答えた後に先生からアドバイスを頂くという形式で行い、2回目は入室から退室まで通しで練習を行いました。そこで私が、学んだ点として、考えてきた文章を面接で出すのではなく、自分の考えをその場でどのように伝えるかを考えながら自分の言葉で話すということを挙げます。面接練習では、予想していた質問や予想をしていなかった質問など様々あります。予想外の質問を答えた後に予想して事前に考えていた話をして内容の矛盾や話の一貫性がなくなってしまうないようにその場で言葉を考えることが大切であると学びました。

4 最後に

大学で行われている講座に参加することについて、教員採用試験に向けて自分から行動することへのきっかけとなると思いました。私はこの講座以降、総合教職実践センターで面接練習をお願いするなど自分から行動して教員採用試験に向けた面接練習をするようになりました。講座に参加する意義は、面接の上達だけでなく、教員採用試験に向けた意識の向上など様々あります。講座の参加は、私にとってとても学びとなりモチベーションの向上にもなり、教員採用試験に向けた一助となっており参加してよかったと思います。





教採対策講座に参加して



教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 K.S

1 なぜ教採対策講座に参加しようと思ったのか

教採対策講座に参加するまでは、教員採用試験についての知識があまりなく、曖昧なままでした。何をしたらよいかということがわからないため不安でした。そのため、まずは参加して知ろうと思いました。そして、教員採用試験についてわかったら自分の力を知りたいと思うようになりました。二次試験の面接は一人ではわからないことばかりで、先生方に面接を見てもらい、より良くしていきたいと思いました。

2 講座の内容や参加してよかったこと

面接講座に参加したことで、自己分析をすることができました。参加をするまでは、自分のことを把握できていなかったり、考えを整理することができていなかったりしていました。参加をして、さまざまな質問を受けることで、自分は何をアピールすることができるのかを考えました。さらに、どのような教員になりたいかをより具体的に考えることにもつながりました。

また、他の人の面接を見て、刺激を受けることもできました。比べてしまい自分のできなさに落ち込むこともありましたが、人のいいところを見て、私も真似しようと思うようにして、参加しました。他の人の質問も自分だったらどう答えるかということ徹底して行い、質問された時のレパトリーを増やすことをしました。参加したことでみんなはもっとやっているから、自分ももっと頑張らないといけないことができました。

3 教採本番に何が役立ったのか

実際、本番は練習で聞かれた志望動機や自己PR書の深掘りなど基本的な質問があまりされず、とても焦りました。しかし、練習をしていたおかげで、他の人に話すということに少し慣れることができていたので、あまり緊張せずに本番で話すことができました。練習通りに聞かれることはあまりありませんでしたが、練習をしていたことで、自分の考えをしっかりとつづることができていたのか、どのような質問でも話すことができました。

4 後輩に伝えたいことやどのような教員になりたいのか

教員採用試験に向けて、焦らず、今できることをしっかりとやるのが大切だと私は思います。教員採用試験の勉強ばかりをやるのではなく、日々の授業をしっかりと受けたり、アルバイトやボランティア活動などを続けたりすることもとても大切です。二次試験は自分のことをアピールする場であるため、日頃からやっていることや考えていることが生きてきます。特に、教育問題には目を向けておくのがよいと思います。その中でも関心があるものにはしっかりと自分の考えをもてるようにしておくことは面接の役に立ちました。

4月から子どもたちの前に立つと思うととても緊張しますが、面接練習から考えた自分のなりたい教師像に少しでも近づくことができるようにしていきたいと思います。





4年生教採対策講座②に参加して

スポーツ科学部スポーツ科学科4年 S.I

1. 一次試験対策

私は、大学推薦で名古屋市教員採用試験を受験したため、総合教養と専門教養は免除で小論文の試験のみでした。小論文の試験対策としては、名古屋市は何年か前から「〇〇という言葉から想起されるテーマを設定し、あなたの自身の具体的な体験と教育観とを関わらせて論じなさい」という問題が続いていたので、その問題に対してどう書けばいいのかという流れを重点的に確認しました。そして、過去5年分くらいの問題を実際に解いたり、文章を書いたりするということをしました。練習をしておく事で、内容を考えれば良いだけになるので、試験時間に余裕ができ、しっかりと内容を推敲することができます。何度も読み直し、文章におかしいところはないか、誤字脱字はないか、文章量は足りているかということをしつかりと見直すことが必要だと思います。

2. 二次試験対策

私は、教員採用試験に至るまで、就職活動などの面接を一度もしたことがありませんでした。そのため、したことある面接といえば、バイトの面接のみで、きちっとした面接の時の礼儀作法や言葉の使い方、話し方など分からないことばかりでした。そのため、一次試験通過が決まってから、水野先生、内田先生、竹脇先生のもとで面接指導や場面指導についての指導をしていただきました。面接指導では、ノックの仕方から話す時の姿勢、発声の仕方など初歩的なことから、話す内容など細かいところまで指導をいただきました。また、場面指導の指導では、事前に出題された5つの問題について水野先生と竹脇先生から、どう表現するのかの指導をいただき、そこから何回も練習をするということをしました。誰もいないところで、1人でイメージするところを人に見られるというのはとても恥ずかしいです。しかし、そう言っているのは上達もしないので、そういう恥は捨てて一生懸命に練習してください。どちらも、何度も繰り返し練習をして、回数を重ねるごとに上達していくと思います。また、総合教職実戦センターの二次試験直前対策講座にも参加しました。他の学生の面接や場面指導を見ることができたり、意見交換をしたりできて、とてもよい刺激になりました。先生方は、親身になってたくさんの指導をしてくださり、良いところは良いと褒めてくれたり、悪いところがあっても優しく指導してくださるので自信を持って試験に挑むことができました。

3. 最後に

私は、4月下旬まで特別支援学校教員か消防士になろうかを迷っていました。そんな時に、名古屋市の教員採用試験の説明会に足を運び、特別支援学校教員の学内推薦があるということを知りました。そこで、「自分にもチャンスがある」と思い、教員採用試験を受けることを決意しました。正直、全てにおいて準備が遅いと感じていました。しかし、実際はそんなことはありませんでした。先生方の熱心なサポートのもと、しっかりと教員採用試験と向き合い準備をしたことで間に合うことができました。遅いと感じることがあっても、諦めるのではなくそこから追いつくことが大切だと思います。最後に、1番大切なことは、授業にしっかり行って良い成績を取るということだと思います。どうしても周りがサボっていたり、GPAなんて関係ない、単位を取れば良いと思うかもしれませんが、それは間違っています。単位という結果を求めるだけでなく、しっかりとその過程を大切にすること、そうすることで自分に1つ自信が持てるかもしれません。





合格体験記（愛知県・小学校）

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 N.E

私が本格的に勉強を始めたのは1月からです。テキストはCDP講座で購入したものを使っていました。たくさんのテキストを使うというよりは一冊を完璧にすることを目標にして取り組みました。一週目はひたすら問題を解き、間違えた問題には百均で買える細い付箋を貼るようにしました。二週目からは間違えた問題を中心に言い、合っていたら付箋をはがすようにしました。この方法のメリットは問題集をやるときに視覚的にどこをやったらいのかが分かる点と付箋をはがす作業が小さな達成感に繋がることだと個人的には感じています。また、一緒に教員採用試験を受ける友達と勉強時間を記録できるアプリを入れて勉強時間を記録するようにしました。勉強時間を記録することで試験当日は「これだけ勉強したから大丈夫だ」という自信に繋がったのでよかったと思います。

勉強をする際に後悔していることは自治体の過去問の傾向を調べて勉強すべきだった点です。勉強を始めたころはなんとなく問題集を解いてしまい、後から過去問であまり出題されていない分野であることに気づくことがありました。効率的に勉強を進めるためにも過去問の傾向を調べて優先順位を決めて勉強することが大切だと思います。もし何を勉強するか迷ったら個人的には教職教養を勉強することがおすすめです。また、小論文の対策は過去問を実際に時間を測りながら書いて練習しました。書いた文章は先生に添削していただくようにしました。何度も練習するうちに書くスピードも上がり、読み手を意識して書けるようになったので誰かに読んでもらうことはとても大切だと思います。

面接練習は様々な先生にお願いしたり、友達と練習し合ったりしました。私は緊張すると頭が真っ白になるタイプなので緊張する練習も兼ねて色々な先生に見てもらいました。また、友達と一緒に練習することで友達の良いところを吸収できたり、後から自分の面接に対して客観的な意見を聞いたりすることができるので一人よりも複数人で練習することをおすすめします。

面接練習で一番印象に残っているのは「自分だったらどんな人と一緒に働きたいか」を考えて臨んだほうが良いという教えます。服装や姿勢、表情など少し意識するだけで改善できるポイントがたくさんあるので、ぜひそれを意識して練習してみてください。

試験当日はとても緊張しますが、今まで勉強したり練習したりした経験が味方になってくれるので大丈夫です。ただ、忘れ物などのアクシデントが起きないように前日までにやる準備はやっておくことが大事です。飲み物や軽食も持っていくことをおすすめします。試験に向かって頑張ってください。





合格体験記（神奈川県・特別支援学校）

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4年 A.H

私は、大学 3 年時に大学推薦で神奈川県の特別支援学校を受験し、合格をいただきました。そこで自分が合格に向けて行ったことを具体的に書いたので、これから教採を受けようと考えている人の参考になれば幸いです。

1. 受験対策について

〈1 次試験に向けて〉

私は、一般受験とは違い大学推薦を使っでの受験だったので試験内容が大学でのこれまでの成績と論作文を見ての選考でした。論作文のテーマはあらかじめ決められていたため、添削を重ねながらより良い論作文にしていきました。今回のテーマは、「あなたは今までにどのような活動、学習その他の経験をし、どのような能力があると思いますか」というテーマでした。なので、自分が今まで行ってきたボランティア活動やゼミ活動などから得た強みや能力について、ゼミの先生に添削してもらいながら書き上げました。この論作文を書くときに意識したことは、自分にしかなく他の人には負けない強みを具体的に書くことを意識しました。また、最初は上手く書けないのは当然なのでそこでへこまず何回も添削することが大切です。

〈2 次試験に向けて〉

2 次試験は、30 分間の個人面接と 10 分間の模擬授業でした。個人面接に向けて行ったことは、まず自分がどうして教師になりたいのかと長所や短所をしっかりと話せるように練習をしました。その後に受ける自治体の過去にどのような質問がされたかを調べそれについても応えられるようにしました。あとは、ひたすら信頼できる先生のもとで模擬面接の練習をしました。模擬授業では、テーマがあらかじめ試験前に与えられていたため、テーマが分かった時点ですぐにどのような題材でやるかを決め指導案を作りました。そして、指導案に沿って実際に自分一人で模擬授業をしたり、ゼミの先生に見てもらったりして、ひたすら練習をしました。

個人面接も模擬授業も論作文と同じように最初から上手くいかないのは当然で、練習をたくさんしても上手くいかないときは必ず出てきます。しかし、そこで諦めずに取り組み続けることが重要です。

2. 後輩に向けてメッセージ

教採合格に向けて私自身が一番大切だと思うのは、「どれだけ自分が教員になりたいという強い気持ちがあるか」だと思います。採用試験は受験日が決められているだけでどれだけ勉強や対策をするかは自分次第です。私は、「教員になる」と決めていたため、早めに勉強や対策をして、それが合格に繋がったと感じています。試験勉強は、なかなか思うように進まないこともあるかもしれませんが、最後まで自分を信じて取り組み続ければ結果もついてくると思います。応援しています。





合格体験記（岐阜県・特別支援学校）

教育・心理学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 Y.H

1. 受験対策・勉強法について

3年のときは、CDP講座や伊藤先生が開いてくださる教友ゼミに参加していました。また春休みには、東京アカデミーの自治体別模試を受けました。この時期は自主的な勉強をほとんど行っていませんでした。4年になってからは、12号館の5階で友だちと一緒に勉強するようになりました。友だちとの雑談の中で、自分の手が回っていない範囲の知識などが得られることもありました。なにより、頑張っている友だちの姿に励まされました。

1次試験対策では、過去問、自分で買った数学や特別支援教育の参考書、CDP講座を受けたときにもらった参考書などを使って勉強しました。過去問に目を通すことで、頑張るべき分野や、そうでない分野がわかります。わからない問題ばかりでも、とりあえず過去問を見てみるのが大切だと思いました。また、教員養成セミナーを1年間購読しました。十分に活用できたわけではないけれど、傾向に合わせた特集や暗記カードなどで知識を付けることができました。2次試験対策では、伊藤先生や、総合教職実践センターの竹脇先生、内田先生にたくさんお世話になりました。また、総合教職実践センターとキャリア開発課が開いてくださる面接対策講座に毎回参加しました。誰かに見ていただく機会があったことで、緊張に慣れることができたり、対応力が上がったりしたと思います。

2. 実際、受験してみて得られた知見や教訓、後輩へ伝えておきたいこと

1次試験でも2次試験でも、予想と違う出題や、ドキドキする場面が多々ありました。試験に向けてたくさん勉強や練習をすることも大切だと思います。しかし本番においては、予想外なことが起こることを頭に入れて、落ち着いて対応することが大切だと感じました。また、岐阜県では、1次試験合格発表後に適性検査と面接カード(自己PR)の提出があります。岐阜県の特別支援学校を受けるのは私だけだったため、何か間違っていないかと心配でした。同じ自治体を受験する人が少ない場合、手続きや書類提出でミスがないように、自分でHPをよく確認したり、先生に相談したりすることが大切だと思います。

頑張れない日が続いたり、人と比べていたりして不安になることもあると思います。私はそのようなとき、友だちや総合教職実践センターにいらっしゃる先生方を頼って、前向きな気持ちを取り戻していました。無理しすぎたり、一人で抱え込んだりしないで、心と体を大切にしてくださいね。みなさんが楽しく教採対策に取り組めることを願っています。





合格体験記（三重県・高校地歴）

経済学部 経済学科4年 R.S

今回、三重県の高等学校教諭地理歴史科の地理で採用試験を受験し、合格をいただくことができました。

まず、私が教員を目指したきっかけは、小学校から大学まで続けていた野球を教えたいと思ったこと、高校生たちの進学や就職といった未来を応援していきたくてと思ったことでした。その中で、教職課程の講義を受けていくうちに、生徒たちに社会科を暗記科目として勉強させるのではなく、その楽しさを伝えていきたい、生徒たち自らが考える授業を展開していきたいと思うようになりました。これらのことは二次試験での面接や模擬授業後の受験生同士の討論でも話す機会があり、自分の目指す教師像として主張しました。

採用試験対策のことを書いていく上で、私自身、合格してから考えてみると他の受験生と比べて特別頑張って勉強したとは言えません。むしろ、他の受験生に比べて勉強の量でいうと少ないと感じる部分があり、参考にはあまりならないかもしれません。

私が教員採用試験の勉強を本格的に始めたのは、3年生の1月後半ごろからです。初めは、大学が休みだったので、バイトと勉強の毎日でした。教育実習の始まる4年生の春頃までは基本的に教職教養や一般教養、専門科目を中心に勉強していました。また、過去の問題については、毎日最低2年分は解くと決めて取り組んでいました。しかし、自分に甘いので一年分しか解かない日もありましたが、まったくやらない日はなかったと思います。大学が始まってからも勉強は続け、空きコマがあれば、教職課程センターに行っていました。ただ、やはりあまり自信はもてず、一次試験が受かるとは思っていませんでした。合格の要因を強いて言うなら、小学校から大学までの学習の積み重ねをベースとして毎日継続して試験対策ができたこと、教育実習での先生方の様々なサポートがあったことです。特に、後者に関しては、ある先生から「自分が一生かけて勉強していくことができる教科を選んで受験すればよい」と声をかけてもらい、その意味においては自信をもって受験することができました。また、とにかく三重県で教員になることしか考えず、試験対策にも集中できたことは大きかったように思えます。

二次試験では、一次試験対策に集中していたこともあって対策が遅れました。三重県は小論文と面接があり、小論文でも過去の問題を毎日解きました。そして、それを大学の教職の先生やゼミの先生に添削してもらい、各テーマの中のキーワードや具体案など、自分の考えを整理した上で本番に臨みました。面接練習については、とにかく多くの先生に相手をしてもらいました。三重県の過去の面接での質問をまとめたものや既に提出済みの面接シートの内容から出題してもらい、納得のいく受け答えができるようになるまで取り組みました。面接本番では、面接シートの中の1つを深く聞かれたのですが、大切なワードごとに自分の考えを整理して臨んだので、納得のいく回答ができました。面接では、一言一句暗記していくのではなく、キーワードごとに整理しておく方が、予想外の質問があっても柔軟に対応できると思います。面接官と一緒に働きたいと思ってもらえるよう、笑顔を大切に、しっかりコミュニケーションをとるつもりで教員採用試験を受けてほしいと思います。

最後に、私自身、教員採用試験対策を他の方よりも取り組んだとはとても言えません。ただ、それだけに、しっかりと勉強して自信をもって教員採用試験を受けること、一人で頑張るだけではなく、教職課程をとっている仲間や教職課程センターの先生など周りの人に協力してもらいながら教員採用試験を乗り越えてほしいと思います。





合格体験記（愛知県・高校福祉）



社会福祉学部 社会福祉学科 4年 Y.T

私は、2026年度採用の愛知県教員採用試験に合格することができました。

今回私は「大学推薦特別選考」という推薦制度を活用して受験しました。愛知県の大学推薦では、一次試験が免除となるため、私は二次試験から受験しました。この制度は、大学での成績など一定の条件を満たすと活用することができます。そのため、採用試験の前に限らず日頃の大学の講義にもしっかりと参加しておくとういと思います。詳細は愛知県教員採用試験の受験案内に記載されているので、ぜひチェックしてみてください。

(1)二次試験対策（面接）

☆面接対策で大切なこと

一番大切なのは、「**自分の経験をどこまで強みにできるか**」だと考えています。自分がこれまでの人生を通してどのようなことを学んだか、成長したかを一度振り返ってみることが大切だと私は思っています。面接官からの質問に模範的な正答を答えるだけなら、誰でもできてしまいます。ですが自分の経験や学びは、自分にしか話せない自分の最大の強みです。自分にしかない強みを面接官に伝えるためには、大学生活の中でさまざまな経験をしていくとういと思います。さまざまな人との出会いやつながり、かかわりを大切にしたり、いろいろな本を読んだりして多様な価値観に触れたりしてほしいなと思っています。

☆面接対策で行ったこと

- ①自分の経験や学びを振り返ってみる
- ②過去問集をチェックして、どのようなことが問われるかを知る
- ③質問内容と自分の経験や学びを結び付けて、面接官にどのような想いを伝えたいかを書き出してみる
- ④友人や先生方に協力していただき、面接練習をする
- ⑤いろいろな本を読んでみる、多様な考え方に触れる

(2)これから受験するみなさんへ

私は自分に自信がなく、人前で話すことも得意ではなく、そして人前で緊張しやすく、面接がとにかく不安で仕方ありませんでした。面接練習でもうまく話せないし、急な質問に戸惑ってしまうことばかりでした。ですが、そんな私が面接で想いを心から伝えられたのは二つのことがあったからです。一つ目は「人生での経験や人とのつながり」、そしてもう一つは「ともに高め合える仲間」の存在です。一緒に面接練習をしたり、頑張ろうと声をかけあったり、こんな素敵な仲間に出会い高め合いながら面接をむかえられたことが、私の頑張る源になっていました。ともに高め合える仲間の存在も大切に。息抜きしつつ、頑張ってください！心から応援しています。



2025 年度教員採用試験 総括



総合教職実践センター副センター長 齋藤一晴

今年度の教員採用試験（以後、教採と省略）は、以下にあげるような変化が生じたなかで行われた。

愛知県の教採は、昨年度まで場面指導が試験科目として試験要項に明記されていた。ところが今年度は記載がなく、受験学生にとって対応が大変だった。実際の試験では、自己 PR や愛知県を希望する理由といった従来問われていた内容に時間が割かれず、ある場面を想定して対応を受験生に答えさせ、その回答に対してさらに深堀していくことにポイントが置かれた。この試験スタイルは、実質的に場面指導である。試験科目の変化への対応、柔軟な準備の必要性が課題として明らかになった。

学生のなかには、AI を活用して面接練習を行ったケースもあった。ひとりで練習が可能であり、いつでも、どこでも行えるというメリットがあるものの、学生自身にどのような課題があるのかについて分析することが簡単ではないというデメリットもある。いずれにしても、AI を活用した面接練習を行った学生に出会ったのは初めてであり、大きな変化だといえる。そうした学生のニーズ、利用状況などについても調査、対応していく必要があるだろう。

AI の影響もあるのか、総合教職実践センターに来室して対面で面接練習やエントリーリートの修正などを行う学生が減ったことも大きな変化だといえる。また、教採対策講座への参加者が近年よりも減少したことも指摘できる。こうした状況の原因を学生に対して対面によるアンケート調査、意見交換会などを行って把握する必要がある。いずれも、学生にとって教採は仲間とともに立ち向かうチャレンジというよりは、あくまでも個人のキャリアに関わるライバル同士の個人戦という位置づけに変化していると思われる。

上述してきたように、学生の教採に対する姿勢には変化がみられる。総合教職実践センターは、状況の変化に対応した新しい企画が求められている。私は、個人戦ではなくチーム戦の大切さを改めて学生に伝えていくことが欠かせないと考えている。教採に向き合うということは、単なる試験対策ではなく、将来の同僚と未来を語る機会であり、4 年間、一緒に学んだクラスメイトと成果と課題をふり返し、共有して新しい目標をみつけていく大切な時間、場であると思う。学生たちとこういった思いや考えを語り合える機会を教採対策講座で設けることをめざしたい。

今年度、教採に関わり最大の変化は、総合教職実践センターに付属高校校長特別補佐であり、愛知県の教採の面接官を担当した経験を有する内田幹男先生が教採対策のプロパーとして在室、学生を指導するようになったことだと思われる。また、片岡和也先生、小野田徳雄先生も教採対策講座や教育委員会の説明会に参加、学生にご指導下さるなど、実際の教採に近い試験対策が可能になったことを指摘しておきたい。学生にとっては、個人面接、場面指導、模擬授業といった様々な面接対策が可能であり、貴重な機会になっている。

近年の教採に関わる変化は、スピード、規模、内容ともに従来とは比較にならないレベルである。総合教職実践センターもそうした変化に対応、学生たちの目標や夢の実現のために、具体的な手立てを講じながらさらに役割を果たしていくことが大切だといえる。

最後に、変化に対応して努力した学生たちを大いに讃えたいと思う。



卒業生からのたより①

子ども発達学部 子ども発達学科 2022年卒業
横浜市小学校教諭 J.K

〇はじめに

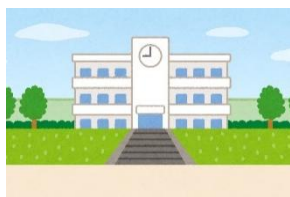
私は、日本福祉大学を卒業し、社会人4年目になります。卒業してはじめての二年間は、名古屋市立の小学校で常勤講師として働いていました。また現在は、横浜市立小学校で採用され、働いています。

現在働いている学校では、6年生を担当しています。教員として、頑張っていることは、いかに子どもの興味を引き出す授業を行うか考えています。どのような資料や話し方をすれば、子どもたちが興味を示すのか、自ら考えようとするのかを常に考え、「先生対子ども」の授業だけでなく、「子ども対子ども」になるような視点、授業構成を考えるようにしています。ただ、なかなか難しいのが現実です。今の学校現場では、当たり前のようにタブレットを使い、自分が10年前小学生だった頃とは、大きく変わっています。ただ、デジタル機器を使おうが、紙媒体を使おうが、「活動あって、学びなし」という形にならないように、「ねらい・目的」をはっきりするようにしています。また、それを考えることもこの仕事の面白さだと思っています。昨年度は2年生を担当したり、これまでは3年生を担当したりと、学校や学年によって、大きく実態や様子によって変わります。私自身、「今までこうやってきたからいけるんじゃないか」と考えてしまうことも多々ありますが、目の前の子どもが変わっている以上、「これで大丈夫」ということにはならないことに気付かされました。30人の子どもがいれば、30通りの考え方や解釈、価値観があります。それらの実態を把握したり、指導法を考えたりと、教員側が頑張らなければいけないことは多々ありますが、どの子どもを相手に話をする時にも、しっかりと筋を通すこと、自分の芯を持つことを意識するようにしています。しっかりと芯をもって、誠心誠意、話をすれば、子どもや保護者の理解は得られると思います。

〇後輩のみなさんへ

まず、大学生活を思う存分に楽しんでください。そこで経験したことや学んだことを教員になった時にいかしていったほしいと思います。やはり、様々なチャレンジしてきた人は魅力的な人が多いと思います。そして人との出会いを大切にしてください。ゼミの先生、学部の友達、サークルや部活の仲間、卒業した今でも定期的に会うことがあります。ここに書いた仕事の悩みや、くだらない話をするたびに「いい人たちに恵まれた」と思います。同じ夢に向かっている友達やサポートしてくれる人を大切にしてください。

教員という仕事は、テレビやネットでも言われているように、本当に多忙な仕事です。日々の授業準備、児童対応、保護者対応、行事の計画、校務分掌など...正直楽しいことよりも、しんどいことの方が多いかも知れません。しかし、自分なりに教材研究し、実践した授業、子どもたちの前での振る舞い方一つで子どもの反応が大きく変わってきます。(良くも、悪くも)ただ、そこが、この仕事の面白いところだと思います。今、目の前のことを楽しみつづ、時には先を見通して、あなたらしく頑張ってください！



卒業生からのたより②

教師としての4年間を振り返って

国際福祉開発学部 国際福祉開発学科 2021年度卒業
愛知県中学校教諭 K.S

1. はじめに

私は2021年度に日本福祉大学を卒業し、愛知県内の中学校に努めています。教員として4年目を迎え、任される仕事も増えました。また、日々子供たちと過ごす中で子供たちから新たな気づきや学びを得る、そんな忙しくも楽しい毎日を送っています。この4年間で私が感じたことや気づいたことをまとめますので在学生のみなさんの参考になれば幸いです。

2. 日々授業のアップデートを目指して

現在私は、3年生の英語を担当しています。4年間の勤務で学年も一回りし、全学年で授業をしましたが、まだまだ至らないこと、スキルのなさを実感することばかりです。令和の日本型教育の構築を目指して本校でも様々な実践がなされています。ICTツールを活用した授業の工夫や、子供たちが分かる喜び、学ぶ楽しさを感じられるような活動の設定など、授業のアップデートを目指して日々研鑽を続けています。4年間で試行錯誤しながら授業をしてきましたが、特に「英語を話す雰囲気づくり」と「英語を使う明確な場面設定」の2点を意識して授業づくりに取り組んでいます。ALTの先生と話すことに抵抗感をもっていた生徒も、今では「もっとALTの先生と話したい」と意欲的に会話活動に取り組むようになりました。

3. 学級経営の重要性

1年目から担任として子供たちと関わってきました。右も左もわからなかった1年目と比べると、今では学級経営の中で自分のやりたいことや目指す生徒像、クラスのあり方が少しずつ明確になってきたように感じます。昨年度初めての3年生を担当した際、学級経営の難しさ、重要性を改めて感じました。そのクラスは4月当初、進路に対するプレッシャーや不安感からかどこか暗い雰囲気でした。勉強が苦手な生徒の欠席も増え、行事に向かって盛り上がる雰囲気もあり感じられませんでした。苦しい1学期を終え、2学期を迎えました。クラスで行事や学習に向かう一体感や前向きな雰囲気を醸成するため、クラスのリーダーたちに働きかけました。担任としての思いを伝え、リーダーたちから周りの生徒への働きかけを促しました。2学期を終え少しずつ希望の進路に向かって前向きに取り組める雰囲気づくりができてきました。3学期にはお互いの進路を応援し合える良い関係性ができてき

ました。3月には皆良い表情で卒業していきました。担任として多くの課題や気づきを得られた1年でした。

4. 改めて感じる教職の「やりがい」「面白さ」

この4年間で修学旅行担当や初の進路指導、文化祭担当などさまざまな仕事を任せていただきました。正直しんどい時期もありましたが改めてやりがいや面白さを感じています。まず、毎日毎日が変化の連続で日々子供たちもクラスも変わり続けています。ときにはトラブルが起こることもありますが、卒業式や合唱祭など、成長を実感する場面に立ち会えたとき、「教師になって良かった」と強く感じます。そして子供たちと一緒に何かをつくり上げたとき、大きな達成感を感じることができます。

5. 最後に

4年間を通して大変なこと、悩むことも多々ありました。そのたびに先輩の先生方からアドバイスをいただき、子供たちからはエネルギーと笑顔をもらいました。たくさんのことを学び、充実した4年間でした。忙しくも毎日が楽しく、成長を感じられる日々を過ごしています。今、教職課程の皆さんは、教職課程の単位取得や教員採用試験の勉強に力を入れている頃だと思います。教師はとても魅力的な仕事です。大変なことも多い仕事ですが、何よりも子供たちの成長を実感できる素晴らしい仕事です。教師として働く自分を想像し、ぜひその姿に向かって頑張ってほしいと強く思います。大学4年間での学びは、これからのみなさんが苦しいとき、困ったときの支えに必ずなるはずです。夢に向かって努力を続けてください。応援しています。





卒業生からのたより③

～悩みながら走り抜けた半年間～

教育・心理学部 子ども発達学科 2024年度卒業
特別支援学校 聖母の家学園 教諭 M.H

1. 半年間教員として働いてみて

教員として働き始めて半年が経ちました。日々の授業準備にはやりがいを感じる一方で、想像以上に大変なことも多くあります。4月、いきなり一人で授業を担当する教科もあり、右も左も分からないままスタートしました。年度初めにはシラバスを作成しますが、子どもたちの実態も分からず、1年間の見通しも立てられない中で、どんな授業をすればよいのか迷い続けました。そんなとき、先輩から「分からなくて当然。大枠だけ書いて、子どもと出会ってから決めていけばいい」とアドバイスをもらい、少し肩の力が抜けました。最初の頃は「こんな授業でいいのかな」と悩む日々でしたが、大学時代の模擬授業で扱ったネタを参考に授業づくりを進めることで、少しずつ自信を持てるようになりました。

子どもたちの反応に一喜一憂する毎日ですが、なぜ上手くいったのか、なぜ上手くいかなかったのかを振り返り、次に生かすことの大切さを実感しています。困ったときは先輩に相談しながら、今では子どもの実態を踏まえ、「一緒に学んでいきたいこと」をイメージして授業計画を立てられるようになってきました。大学時代の模擬授業の経験が、今の自分を支えてくれています。

2. 大学時代を振り返って

大学時代を振り返ると、同じコースで4年間学んだ仲間の存在がとても大きかったと感じます。夏休みを経て、職場の先輩とも少しずつ関係性が築けるようになりましたが、それまでは相談することも中々難しく、孤独を感じることもありました。そんな時、大学時代の仲間と連絡を取り合い、自治体も校種も違うけれど、同じ教員としての不安を共有できたことで「ひとりじゃない」と思えました。夏休みに仲間とディズニーランドに行く約束をしていたことも、日々の仕事の励みになりました。大学時代に築いたつながりは、社会に出てからも心の支えになります。

3. 後輩へのメッセージ

これから社会に出る皆さんへ、私から伝えたいことがあります。それは「楽しみを見つけてほしい」ということです。どんな仕事でも、趣味や推し活など、自分の好きなことのために働くという目的があると、頑張れる力になると思います。大学時代に好きなことを見つけて、目いっぱい楽しんでください。そして、一緒に楽しめる仲間を見つけてください。私の場合は、大学時代に新しく趣味で始めたアコースティックギターの経験が、思いがけず今の仕事に活かされています。学校では、在校生や卒業生を含めたバンド活動のサポーターとして活動しており、趣味が仕事につながることもあるのだと驚いています。まだまだ演奏は下手ですが、一人で練習していた頃よりも何倍も楽しく練習できています。子どもたちとの共通の話題にもなり、会話が広がるきっかけにもなっています。自分に好きなことがあると、子どもとの距離がぐっと近づく瞬間があるのだと実感しています。

大学時代にできたつながりや趣味は、きっとこれからの人生でも大切な支えになります。学びも遊びも、仲間との時間も、どうか大切にしてください。皆さんのこれからの歩みが、豊かで実りあるものになることを心から願っています。



教育実習体験報告（高等学校）

スポーツ科学部 スポーツ科学科 4 年 A.A

はじめに

私は、6 月 3 日から 24 日までの 3 週間、母校の私立高等学校で教育実習を行いました。自分がかつて机に向かっていた場所で教師として立っていることに、緊張と感慨でいっぱいでした。当時お世話になった先生に指導教官として指導をしていただき『習うより慣れろ』という教育実習生目標の下、初日から最終日まで 40 時間ほど授業実践を行いました。指導案や授業づくりに明け暮れる毎日でしたが、実践を重ねるごとに成長を感じられ、自信ができました。多くの壁に直面し、折れそうになった時もありましたが、実践でしか得られない学びが多くありました。大変だった教育実習も、生徒達から沢山の力をもらい、長いようであっという間の充実した 3 週間となりました。



日本福祉大学の強み

私の担当するクラスは、スポーツコースで運動が「できる」生徒が多かったです。しかし、その中でも苦手とする生徒がいたり、性格上積極的に参加できなかったりする生徒もいました。ここで活かされたのが“異質協同の学び”です。能力や性格・性別が多様なクラスでどんなルールや制限をつけるのかを考え、「できる」生徒がなぜできるのかを言語化してどの生徒も「わかる」へと導いていったり、全体の流れを調整したりすることで、自然と全員が参加できる雰囲気を作ったりすることを心がけました。また、看護科や普通科の授業も担当しました。同じ単元の授業でも、クラスによって内容を一から練ることで、実態に合わせた授業を行うことの大切さを実感しました。

保健体育の教育実習でしたが、特別支援教育の視点が最大限発揮された実習でした。日福大のこれまでの学びは決して無駄ではありません。むしろ、他大学にはない強みです。授業の作り方や福祉の視点、子ども理解...私はこの実習でこれまでの学びが自分の力として身についたのを実感しました。特別支援教育が通常教育の原点であると肌で感じました。

最後に...

この 3 週間で私自身が感じたこと・学んだこと・伝えたいことは数え切れない程ありますが、自分の目で見て肌で感じて、沢山の壁にぶつかって経験してほしいと思います。私から一つだけ伝えたいのは“学ぶ姿勢”を忘れず、教師という仕事を全力で楽しんでください。今、理想の教師像がはっきりしていなくても、3 週間を乗り越えた先には理想像が確立していると思います。大変だったけれど、そんなことも忘れるくらい価値のある 3 週間でした。

この 3 週間は教員人生の原点です。一日一日を大切に、“教師”という仕事を楽しんで、自分なりに「教師って...」という問いを深めていってください。



教育実習を振り返って

社会福祉学部 社会福祉学科 4 年 S.K

私は、高校の福祉科の免許状を取得するために 2 週間、福祉科の高等学校で教育実習をさせていただきました。私自身には、手足が不自由な障害があり普段は電動車椅子で生活をしています。今回は、私ならではの側面にも触れながらお話しさせていただこうと思っております。

① 教育実習が始まる前までのこと

教育実習が始まる前、私は「本当に教育実習をすることができるのか」特に配慮の面で不安に感じていました。実習中の排泄や食事などの生活の介助や通勤までの手段、そしてどのように授業を展開して、どのような形で成立させるのか。クリアしていかないといけない課題がたくさんありました。しかしながら、その部分の課題をクリアしていくために指導教官の先生や教職課程センター(当時)や実習校の方と話し合いや調整を重ねていきました。そして、課題となる部分がどのように取り組んだら良いかの方向性が 1 つずつ見えてきました。結果として、教育実習に不安なく挑むことができました。

② 教育実習

いざ教育実習を迎えてからは、生徒と短い時間の中でどのように関係性を築いていけるかが自分の中のテーマになりました。最初はどんな感じで生徒と話をしてもらいたいのか戸惑うこともありましたが、今流行りのポケモンカードを自己紹介カードに見立てた工夫をして名前をまず覚えてもらうことをしました。その結果として多くの生徒さんに名前を覚えてもらうことができ、そこから会話も広がっていったと思っています。

また、私が担当させていただいた授業では生徒が主体的に授業に参加して、積極的に意見を言うことができる環境を意識して授業作りに取り組んでいました。同じ授業でも生徒が違えば全く反応やかかる時間も変わっていきます。その部分に苦労することはありつつも、全く同じ授業でも生徒が違えば同じにならないことはすごく面白いことだと感じました。私自身には自分 1 人ではできないこともありましたが、そこを強みに変えて多くの生徒とコミュニケーションを取る時間にしつつ助けてもらったり、同じ実習生と協力し合ったりすることができて良い時間になりました。

③ 教育実習を振り返って学んだこと

教育実習をさせていただいた高校はエレベーターがありませんでした。そうなるとう上下の移動は難しいと考えていました。しかし、先生方や生徒さんの協力のもと毎日階段をまるで祭りの御神輿のように担ぎ上げられました(笑)。その部分で、私は自分の中で 1 番の学びを得たと思います。「階段を上る」ことは自分の中ではできないことだと思っていました。しかしながら、それは自分で自分の可能性を狭めているだけなんだということに気づきました。教育実習で過ごした 2 週間がすごくフラットな関係で築けたからこそ、自分の可能性を広げられる時間になりました。

④ これからのみなさんへ

教職課程を目指すことや教育実習に行くことは多くの不安があるかもしれませんが。私だって不安なことだらけでした。でも私は 1 つ自分の中で迷信だと思いつつ信じている言葉があります。それは、「なんとかなる」です。多くの課題があっても、不安があってもきっとそれは乗り越えられるからこそ自分に降りかかってきているのだと思います。ここを一步踏み出す勇気があれば、自分自身も見ることがないような可能性が広がっていると思います。ぜひ教師という扉を皆さんも開けてみませんか？



研修・連携部門

研修・連携部門長 鈴木庸裕

1 2025年度の取り組み

(1) 研修部門（教育実践研究にかかる事業及びリカレント事業を行う）

この部門は養成・採用・研修の3要素のうちの研修（研究と修養）という領域である。部門（地域連携にかかる事業及び組織連携にかかる事業を行う）は地域・教育連携の領域をもち、こうした事業を学際的に企画・運営する部会である。

研修の領域では、教育実践研究センター時代から現職教員のリカレントや教育実践開発を継続している。本学 FUKUSHI ACADEMY との連携において、リカレント「学校福祉」企画の研究開発と運営に従事している。2025年度は70名ちかくの受講生（第5期）で実施を終え、大学認定の『学校福祉士』を輩出してきた。5年目になる本事業の成果の一部には、教職員の多職種連携をめぐる『学校福祉実践論』（ミネルヴァ書房・2024年、共著）や『ウェルビーイングな学校をつくる』（かもがわ出版・2025年）などの出版がある。現在、「福祉的センスをもった教師」「子どもの主体性を一緒に考える教師」「ウェルビーイングな学校をつくる他職種との協働」などをめぐり、教職を目指す全国の学生への「手引き」になるような著書の共同執筆を準備している。

(2) 連携部門（地域連携にかかる事業及び組織連携にかかる事業を行う）

この部門は地域・教育連携の領域をもち、研修部門と同様、センター事業を学際的に企画・運営する。現在、奥田小や河和小の学童保育での「算数工作教室」や「アダプテッドスポーツ」（トワイライトスクール）での取り組みが引き続き運営されている。この連携事業は、子どもによる学びの再発見や地域の児童・保護者との交流などを通じて、本学学生にとって教育実践の豊かさに気づく機会となっている。今後、教育現場での授業学習と家庭学習との間にある学習方法論の開発、本学学生（ボランティアを含む）のための授業研究や子ども理解研究の基盤づくりなどに資するものである。

2 将来構想界限

2027年以降2030年くらいにかけて、美浜キャンパスのグランドデザインは大きく様変わりする。美浜キャンパスと教育・保育、子育て、生活・暮らし、福祉、産業、文化、仕事などをめぐる美浜町（知多半島南部）とのかかわりが問われてくる。人口減少、高齢社会などへの一手として、地教委や小中一貫の個々の学校との協力関係だけでは済まない。

社福移転後のキャンパス構内の「跡地利用」なのか、例えば多様化学校やオルタナティブ学校を有した「田舎」でのコミュニティ学苑構想なのか。地元多世代の地域住民に求められる大学としての存在が大切になる。半田や東海のキャンパスも同様であろう。

いま、その瀬戸際にあつて、キャンパスの立地環境を活かした学習、遊び、文化の里山の学舎や里山・里海づくり、スポーツ・健康・身体・保健、生物多様性・気候変動と生活科学、食育・食農、農福連携、インクルーシブ社会のステージを有したキャンパスライフと他大学が追従できない教員養成ビジョンとの接続を打ち出したいものである。

ただ、本学（美浜キャンパス）の所有地は建物や幹線道路とその周囲ののり面だけであり、大学を取り巻く広い雑木林や竹林は、そのほとんどが借地あるいは地権者が異なる。こうした条件を再整理していく根の深い地域連携について、本学関係部局にも働きかけ、推進していくことが望まれる。